

雅三俗七録  
七

特別  
14  
1919  
170









ひ通れに鮎が美味う御座います何所か  
因つて味を連ぬるその鮎の食物を  
藻の行状を違ひ後れその多しといふと少い  
之れを違ふかすむす 鮎の身を俗にアカ  
と申すやうに一書上等なるを極くの清流  
又大ききカブらぬの鮎はあつて其れを極  
く細きものも滑か比とすかあつと云つ  
て極く細かい柔い鮎藻の附きまます、粗  
質なるものも俗にマダツアかと云ふ福島の  
の鮎藻の附きまます、その上等なアカを  
はひぬるものも鮎の身をけぬはぬうはえ



味が長くうすめんれし上等な物も押し  
ても三つも四つも大魚が附き纏つて大み出  
てまゝの付るもの鮎藻を押し流してその  
其れ五つも六つも漁人の鮎を餌目と餌に  
そゝゝ味をうす、御座いますと云つて  
廿一月七日晴天う纏つてと川のあつ減少  
して鮎の住み方が狭くつてます、その鮎  
藻の餌を食せしむるこゝろ硬くつて  
ます、その鮎を矢つて強くと餌と味を  
悪くつてます、鮎藻も其れを同じ極く  
為り、その餌の若芽うすつて美味い











評判ふのもそんなうめゆき、そんな雄  
は雄の方うまう御座いさんおまは  
の鮎をフライーしそ外の料ねは  
と脂肪分うまうくつ骨う硬くつ  
味もよく早川の鮎より及びずらん  
早川の鮎をその代に鮎をあるは  
す云

○浅草の公園、武蔵野公園の六角の細い  
い柵も用えてある、六角の角をその角を  
殺してあつた、これを角人工うかたつた  
思つてその、おまは、此は久能山く行つて  
こと、目階の土砂管、六角の細い石を用  
えてあつた、越く視ると浅草のと同じ  
ひま、他はあつた、おまは、あまゆき  
おま、こんと人工の加つた、おま、  
まの御家うまう出る自れ、おま、おま























あるをこむ或る距離をたして押す打ちあ  
ひの合つて針目ハ拘束を脱してそのま  
ま海しく火薬を刺して二三日の経過後  
大撓を発生し死者の遺体を為すといふ  
也。その事。

○あるが前田原とある。静つてかく汽車や  
陸軍兵少佐館本政雄とある。出でた北人  
を二十餘年前の道又か人か。陸軍大佐の  
田原の教授とある。大分兵少佐の  
教授とある。その事。率や。その事。



詠の口交換をしたが、甲斐の海軍海  
軍大佐の味を脱して今ある其の方面を  
あきらめつけしえん。

○陸軍の体の脱。陸軍の下の海軍を同じ  
扱ふ火薬を用えてその事。此の脱  
は依つて推す。陸軍の海軍と互ひにお互ひ  
一方の脱。海軍の海軍。海軍の海軍の  
その事を排斥して用ひ。その事。海軍の  
海軍。その事。その事。その事。その事。  
火薬の大砲の中。海軍の海軍の海軍の

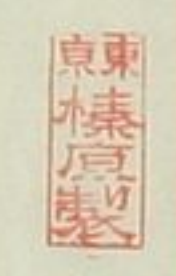






なる砲の老ひる迄を餌扱へ用くつを砲筒を  
維持す。必要の策、も知んる。

○今一ツ強ん、改良を加へ、そのをウルフラ  
ムを鋳入加へて鑄る扱へる。こんごう一近  
ひある、とこふの、こんごう大砲の、前、昔、昔  
しある、織板の、揃まとうし、こんご  
エス、こんご強ん、を打て扱へること、出  
る、つ、兵士と楯の、後、つ、つ、戦  
中、平、氣、は、出、来、比、の、あ、る、  
此の、想、を、傳、へ、織、板、を、打、て、扱、き、得、る、こ、と  
あ、つ、た、其、評、を、ら、ん、つ、ら、り、と、ま、よ、こ、の、ま



非、重、の、大、さ、る、こ、の、か、強、ん、の、力、が、こ、の、  
為、の、或、倍、の、持、抗、力、を、増、し、た、為、め、あ、る、こ、の、  
タ、ン、グ、ス、テ、ー、ン、と、ま、よ、こ、の、用、比、重、の、大、さ、  
こ、の、同、じ、目、的、を、な、す、こ、の、効、能、あ、る、こ、の、  
こ、の、出、る、こ、の、甲、物、の、出、る、こ、の、  
出、る、こ、の、

○今、火、薬、の、強、ん、を、グ、レ、ー、パ、ウ  
ター、セ、リ、の、出、る、こ、の、出、る、こ、の、此、の、グ、レ、  
ー、パ、ウ、ター、と、ま、よ、こ、の、火、薬、を、も、と、ま、扱、へ  
の、名、の、あ、る、此、の、火、薬、を、強、ん、を、射、す、  
あ、つ、た、従、来、の、烟、硝、を、比、せ、る、は、或、倍、の、力、を



あつてそのころのころ、従来の烟硝を火に移  
ると重く、煤粉を全即火の一のり、火  
す、そんなうらな、弾丸を砲身を脱する  
の摩擦のため、砲身の力を失ひ、  
あつてのころ、此の火薬と、  
硝のめ、風を、  
の薬を、火つけ切つた炭粉を用へ、  
火うけくと、  
あつてのころ、  
炭粉を用へ、  
一のり、  
一のり、  
一のり、

東洋堂製

炭粉を焚え、  
を脱せんとする時、  
即ち極ぶの力を、  
あつてのころ、  
揺む其の力を、  
力を以て、  
すんば、  
焚え切らば、  
ふ、  
とのり、  
○大砲を焚き、







火災日堂亭と焼失したところだが、今も  
其の古しう遺物をせよのありとある、その  
傍らと頼ま竟れとせし納しとせよか中あせ  
今天竺と進羅玉位石山向仁左事人耐も奴と昔  
いとあるとせよと云ふ國つともある人のあると  
が、こゝろ、其奴の後をうもたせよとせよと  
こゝろ、こゝろ、馬場町と山向をいしてその  
と七物所札のけと山向と云ふわろ物と  
二軒あるとせよと云ふの後商かと言ひゆる  
そのさうに、保し山向の方、其の此とある  
うしいと云ふ、こゝろ物と云ふ一の優物



ひあつた、山向と云ふ、其の此とある、そのさうに、  
物の中、其奴の方、保しと云ふ、こゝろ、こゝろ、  
とせよと云ふ、一尺横七寸計りの、そのさうに、  
位の折、其奴の方、保しと云ふ、そのさうに、  
年を、其奴の方、保しと云ふ、そのさうに、  
とせよと云ふ、そのさうに、そのさうに、  
龍徳の口、保しと云ふ、そのさうに、そのさうに、  
を言ひ、そのさうに、  
○臨海寺と云ふ、其の所と出さ、海、其の社  
と云ふ、折、其の所と出さ、海、其の社  
と云ふ、折、其の所と出さ、海、其の社



の事殿より即ち在りてと云ふ事ありし其の寺  
の庭園と元祿の山に而も骨地らけの山  
其の骨を露出せし事ありしに云ふ事あり  
いし事ありし事ありしに云ふ事ありし  
地の横物に著る事ありしに云ふ事ありし  
雅俗と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
ふ事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
完出しに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
七條に云ふ事ありしに云ふ事ありし  
人間界と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
う事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
天文十八年

東表

家系七代今川家と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
居の時、日々に地を耕す事ありしに云ふ事ありし  
不和者言ふ事ありしに云ふ事ありし  
也、その時、漢者の言ふ事ありしに云ふ事ありし  
こ、ソウの貴物と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
か、その七代物と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
二日、その事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
し、信濃守の位と云ふ事ありしに云ふ事ありし  
る花つれと云ふ事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
と云ふ事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし  
城址のある山と云ふ事ありしに云ふ事ありしに云ふ事ありし







その儘に高和の修繕の目論見陸が  
三冊を元付の修繕の拵物略々  
九比、その方の修繕を即ち元と則ち  
無法をのし七前さといひ充分鄭重な  
つとるべきと説つた

今を修繕の拵つたを重々廻廊と檜門は本  
社と次回の修繕に譲ると云ふ事だ、  
社の廻廊の両側にある壁面を非常に剥  
落し次回は修繕を延びしと云ふ人を  
画の痕跡を留めたいと拵つたといふ  
ひ、と云ふ拵つて修繕を加えること  
を決しき

東林書院

狩野友伝の古殿を、  
新らに目下著作中と云ふ、  
誰のうきと云ふは狩野宗川の  
社務よりと、欄間の装飾の塗  
物の彩色を一新する彩色し  
たるにありたり、  
後を彩色したるの意外は鄭重な  
又その、二萬三千円を拵つ  
全体此の社の修繕を社自身  
以てし、  
補助を交する



近新麦草の除三千石の朱印を御取荒千の  
とまふ成りし様をきん日利の利日を積むし方  
とまふ教書の日次をきん日とまふし方、つま  
五年をきん日七斗の利息を以て追々修  
繕をせらる所は仕組とてきん日、何んかとも社  
独自の修繕としてきん日下等とてきん日唐門  
らんとて<sup>（澤野）</sup>十四年をうけ流のことききる教書  
七分のものをきん日を又塗るの積り粗方  
ひ七十二四の年をうけてきん日を  
修繕を四月のち終らんとする積りとも折  
角をきん日をうけて修繕し此のを雨とてきん日



日と照らしをきん日破壊をせらるこ  
うの如きを霽除けをうけてお修繕を保て  
る様をきん日とまふ、この霽除け七斗  
とて施しをあらせらるこ、又張り其の式  
形とて、とめむつしの出来る様をきん日  
ふこととてきん日  
その説をきん日とて改めハルハ修繕を  
つと玉壩廻廊唐門廟門をきん日とて  
とてきん日とてきん日、修繕と  
とてきん日とて全部の塗りを換へて  
とてきん日とてきん日、美観目を致す



うすくわひあはる

の位を交け、  
飾り

社殿の深うを祇園神籠  
の礼とせえは、家原院の  
お飾りもあはるを一見し  
大工の角帽のこときこ  
しそき而もろく思ひ  
事とそ見しとこきこ  
とそふ花う付けあはる

廊下をもちて、  
しと後、  
と何の危あてあると  
と何の危あてあると



七とと高原のお佛  
入んてあつたの  
佛涅槃を林あま  
取降らん、あ  
此の心が、遠  
思ひつぎむ、  
おぬめれのひあ

この廟も、来  
の遺骸もこ  
埋められた  
何れをこ



わつことき壯觀を極め大経字をしとふよ  
りせんは日光こそ遺骸を埋めしむの極  
み居へらん、明徳二十七八年ころしを  
政もこの解群ひありしを見えし久能  
山を移れしと見えぬをそつた、あまの  
みあふ原の埋骨の地を久能ひあつて  
日光を政略上なる壯觀としとふひ  
そふ入ふ原の字を久能とせしとふ説  
がさうりた、と見えぬも元油へを人市と  
こととあつたが、四五十年油考ふ時を考  
しと後、今も久能の埋骨の地と説の

徳川

この別格者勢大社、昇格せんたと云  
ふこと  
各千の元物う満ちるまは、遺物の陳  
列をんた、多くは礼装のたね、具足の  
こときは、六十五品の多き、と立派な  
備存せんことを、勿論歴史的価値は用  
の具足順序をしく、駢つてある、と  
具足物の匠の沿革、が完るゝ研究  
せんて、此の人のまの、女便利を具  
あつこととあつ、福立の法、極め  
皇んと何んか江戸傳のあまの、牧



しとあるはよむある、それを維新の徳川が  
へり流さん、徳川家の一振しと、  
附さん此の比と云ふこと、武蔵の中  
津和野のうまをやる、金扇の馬印も  
えん、さうさぬ尺ふとの十本骨の骨  
骨を竹を漆の漆をうら、地紙を骨  
布の上の海を置いとよむ、  
をみしと云ふ、家原と共、武蔵  
比よのと、  
りゆきさい、  
と徳川家の主、



たの

八年中、  
九比の、  
三池、  
ハ、  
の、  
刀を、  
え、



あつしそらん 漸やくん 其のむあるそつた  
又中津ちの **物** 同一の作とち持してそ  
そつたう、いつそや此の力を視て我の力を  
らんうめあふ二流も下つてと 歎息したと  
そ、ことと、揮山のこときもうつと能てこ  
れをえふ来し 無延 携うふ、或田うく  
幣祝しをあるとゆらと 考ぐしと云ふ、  
何んうしも 飯粒のこせ、いふと又えさ  
○又も公彦 菜若者うと 翁ぬと 翁ぬう聞  
し 其を食ひ 具つ 滋味のあつ 似候と得と  
玉よの向身と 溶解性の蛋白質ニ 割後、鏡



物質一合六層、あ分七割八分給、うと来まて  
そ、黄芽と蛋白質一割六分、脂肪三割  
此後物質一分三層 水合七割二分、うと来  
りまてそつたが 黄芽の 後物質うと 二層の硫  
黄也、  
何れも我うと 翁ぬと泡まて、料理と候のや  
はく玉子の中うま、蛋白質うと 細胞う 薄い  
膜と包まんとそ、泡まてとそ、膜う 改ん  
て細胞う 離れる 離ると細胞も 自分のか  
着性を以てそ、其を其をうとま、うと 膨ん  
て大ききうと、そ、みりみん、胃腸う 入る



消化吸収が良くなることをその第一に  
但し新陳代謝の玉ありと云ふは、  
此針りの玉ありをまず、  
泡立て、  
味が悪く、  
まろやかなし、  
食の味も悪く、  
玉子の足場の堅さを熱を凝結したる  
この流動物と混ぜる熱を加へると流動物  
中の固形物や汚物を引取りを凝結したる



このスープや珈琲やセリーのアイスを飲むと  
流動物を清潔にする、  
入るも其の胃の熱を運ぶ以外の物を  
引取る、  
喉をくすくす胃中の物を吐出させて、  
の手が、  
包んで、  
ある、



子の苦みは半人巾と硫黄うまゝ硫黄を  
卵黄の卵を里くまゝのりこゝろを料比  
とせし卵黄を入るを半くとせし三雲とせし  
ル又玉子をせし湯煮るを苦身の用也  
うまゝの厚里の扱ふもよゝゝのち同しく  
硫黄うまゝのりこゝろを酸化するを新し  
いよゝろ硫黄からうまゝいゝろ飯計る妻  
もろろとせしるを却てそのか減めしと妻  
もろろ苦みの同し新し玉子を放し飼  
うと此鶏の玉子を飯計る硫黄分を含  
あゝと妻もろろ苦しい柵飼うとよゝろ



妻もろろ苦み

鶏の選い方と此を左のことと注せし  
と此つこゝろ

鶏肉を煮い鶏心をけんば肉も柔う味  
もよいとよゝろ洋を煮うとせんう三ろ五日  
以内とせし雄の方うよいのひま せんう  
大きいのを雌のひま せんう一匹雌が  
よいとせしあまをけんば雌の内を雄の方  
料比ゆゑとせししすひあしくとせしと因い  
鶏の中う肉用鶏の種を扱うゆゑとせし  
一と選ぶつと而例はすけんともす人の心











を切取る中の脇肉を引替のて逆さし  
一晚釣こしてさうゆを煮るん釣うしを涼  
しいさくさくとして用中せも二の位おろ  
鶏卵を換ふ家うまの鶏冠を上ホの料  
理さうい心臓も肝臓も後胃もさうく  
料理法さうさうさうさうさうさうさう  
お腹痛のさうさうさうさうさうさう  
又取すし逆の先の高平の肉を芝那料理  
で取すさう上等の湯地芝地五羽のさう  
一人おさうさうさうさうさうさうさう  
何一つ換ふさうさうさう

東林堂製

○この大合縁をいひつる心はさうさうさう  
が要領ありいさうさうさうさうさうさう  
いさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
と浄瑠璃の十二枚を出しに、さうさうさう  
上出来とさうさうさうさうさうさう  
のさうさうさうさうさうさうさうさう  
の記を七講さうさうさうさうさうさう  
二枚と一條成美のさうさうさうさう  
浄瑠璃の文句を例の文句さうさうさう  
仙さうさうさうさうさうさうさうさう



ふ句合じの一寸の酒をなす、外は清浄と来す  
うあいに天手はくも世のなるも風俗画を  
いとまが別な店に扱ふまうたうとい  
ハ後まうと出来てをまう、一安するも  
のり秋びちを曲の信をいさ、  
くまうと出来てをまう、一つの大切なる  
を鉄のまう、とまうの信が  
錦繪的であつて流動してをまう  
ては換へる、とまうの信が  
とまうの信が、とまうの信が  
扱ふのが、扱ふのが、扱ふのが



ちの一枝軸を出して、とまうの信が  
のちの信が、とまうの信が  
地としてをまう、とまうの信が  
ちの信が、とまうの信が  
と外画と扱ふこと、とまうの信が  
○日本人ハ暖炉の作り、とまうの信が  
と焚き物をまう、とまうの信が  
画をまう、とまうの信が  
本画ちえの外画をまう、とまうの信が  
のこまう、とまうの信が  
とまう、とまうの信が







所<sup>（取柄）</sup>にけりてまゝにまゝに、此の之風を一步を進めればよ  
と云ふて多しといふ或は曰く此の之風をまゝにまゝに  
ぬを色あはるゝ試之終る全あはるゝを抹用  
せんとすも、千荷物の市内配をまゝに抹用  
利ひあは、殊に車をゆゑ、行の便をまゝに  
まゝに料金を徴して受領院をまゝに  
の千早さとの試を氣味のよむ位ひある  
○田原の法をまゝにまゝに、西洋の  
まゝに家具を塗るゝまゝにの塗料にまゝに  
う一とせアルキール性な法を、まゝにまゝに  
まゝにまゝに塗りまゝに扱物とまゝにまゝに

東洋屋

一つもまゝにまゝにまゝに、大理石の敷  
を敷せれば其の心をゆるく柄敷いとまゝに、  
まゝにまゝにまゝに、若しワニの皮をまゝに  
まゝにまゝにまゝに、西洋人も物なまゝに  
石の板をまゝにまゝに、及ぶまゝに、漆を  
の家具の外、まゝに手磨くまゝに、外  
人うまゝにまゝに、外人もまゝに、  
月を知らぬまゝに、まゝにまゝに、  
一例もまゝにまゝに、  
○西洋の法、まゝにまゝに、其の料理の



古石を異にしてその由を例の名及米の若  
き依つてやうくことを得たりと

一 西の西洋料理と云つても米回は米子の  
ちうちうと欧米は欧米のちちうちうち  
の料理と米回と其のちちうちのち  
人ううと油をすじ、ゆき菜を切ると供  
すうち佛や西人の特使とある。鮭  
料理と伊方料理とある。べうちの  
ふ米料理と土耳其風と出ると  
イスカシーと印の料理とある。西  
の上の料理とある。風と冬とある。



ちちうちのちちうち



落款屋

紙を塗つて金と成す陳允舛の内職も物かは、箱を虎に解らせ、佛堂裏忽ち羽が生へて飛ぶ今の世の仙術、好其真者要は在慈心の本文にも極うて、是を思へば遠東の鐘磬石に化けたる妖術も、未し筆を揮うて名匠百年の古書を、一夜に何枚と描き飛す偽筆家と云ふがあれば、其れの又上談列ねて偽物の仕揚げを落款屋、下谷區豊住町十三番地に藤田正太郎と云ふ翁ありけり、松雲堂、白井、石田などの古株を始とし、市内に五百を以て數ふる偽筆専門の書畫屋より、日毎持ち運ぶ怪しの塗抹を左も右くもして取繕ひ、目鼻を閉れば忽ちにして雪舟、忽ちにして元信、可翁、兆殿司より、探幽、靈舉、光琳、文晁、好みに隨ひ望みに任せて落款殿めしう、恣くてはごうも偽筆の出来の關防まで捺して、遺蝕ひの桐の箱に何某家の重寶何某寺の什物と納めらるれば、樟腦臭き薄金の布片は見る／＼金色の光を發ちて、何所の馬骨のなぐり描き、

一朝金屋の床間に阿彌と龍を争ふの不思議さは、料理屋の招娘の赤棒が三千六百元のブローチに變れると何れぞ、元いやうなれど、紙を塗つて金と成し、允舛の内職裏を食への言ひ商法を、廣い日本に唯一人領めたる正太郎翁が靈腕、偽筆界の是や救世靈燈、水へに隨筆の功徳を垂れ給へど書畫屋の渴仰をさく／＼淺からざりしが、神仙に尸解の終りあれば、正太郎翁も終ひに人の世の定めを遣れ難く、或夜使ひ古せし肉池の鱗もあらぬに破れしと夢みしより、心地急に勝れずなりて、去月二十八日、偽筆家書畫屋が哀惜の涙は珊瑚末の赤きを欺く中に、年頃親しう爲し古人の仲間己れも籍を移され給ひしは可惜しども可憐し、書や畫や、古人を凌ぐべき大家名匠の所に世に出でん望み無きにもあらねど、此の落款の名手を失ひたる恨みは何時の世にか盡くべき、現に差當つての書畫屋が當惑、近頃戦争の氣橋へは上下押概べての不景氣、株は昨日も今日も暴落の氣配表に血走れる日には、金岡が馬も鐵馬の拂下げの瘦馬ほどにも買は

東橋屋製

れざる所へ、況て落款の落着き拙く印矩を逸れては、是を命の買手に見放されて、正太郎翁が死は今や五百の偽物屋が願を釣針、焦で鯛の旨い事は始終も無いものと見ゆるが、さりとては此の多くの願を己が靈腕一つに握りし翁の生前こそ目覺しけれ、上は政府の鐵道事業より下は豆腐屋の賣子まで、渡世となれば何れか競争と云ふ事死れ難き世に、此の落款屋のみは外に類を眞似手の無い天下一品、尤も芝の三田に近頃大柳と云ふ老人が始めしよしなれど、固よりお話になるほどのものにもあらねば、左右くは正太郎翁一人領めの二八月を知らず、

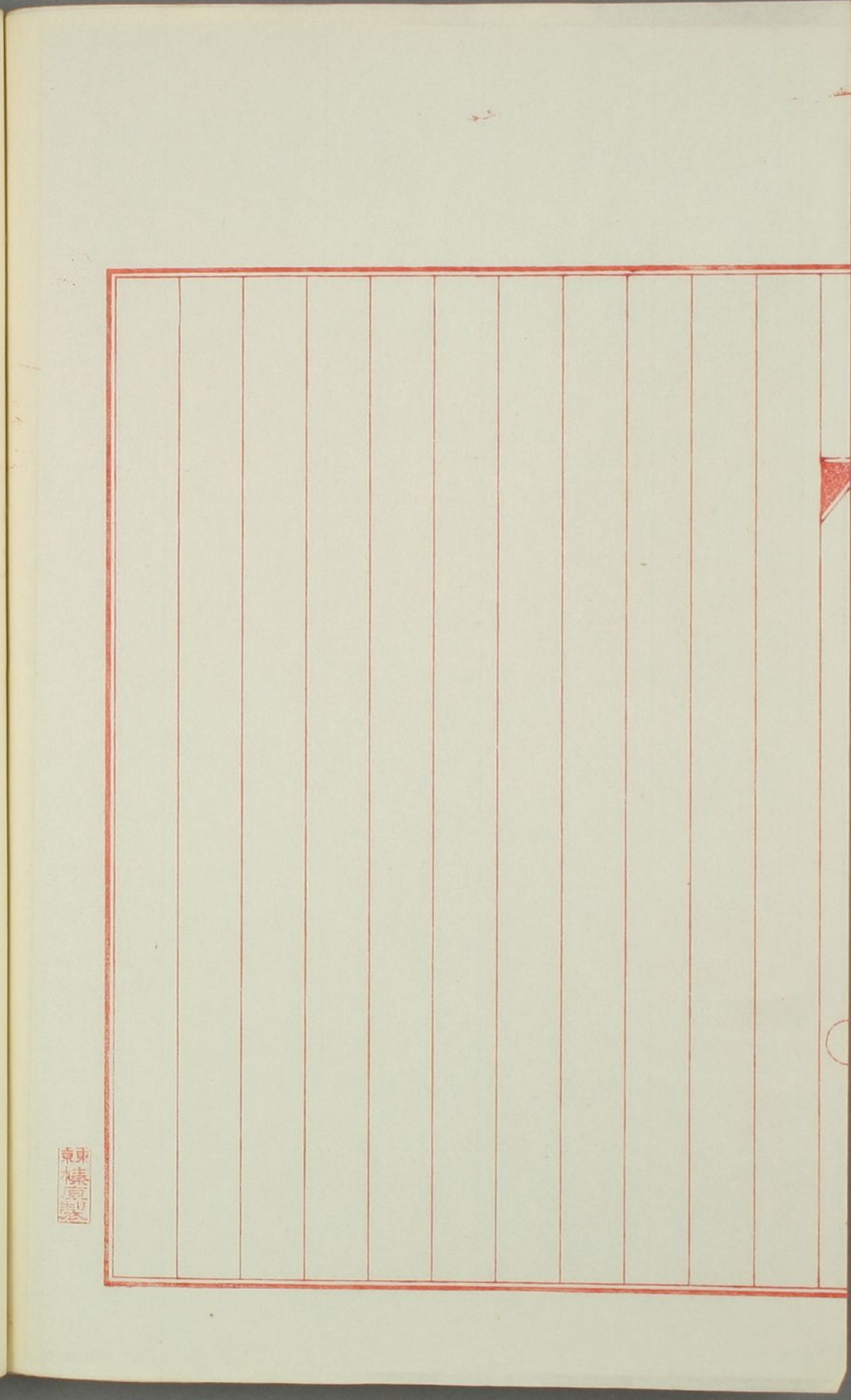
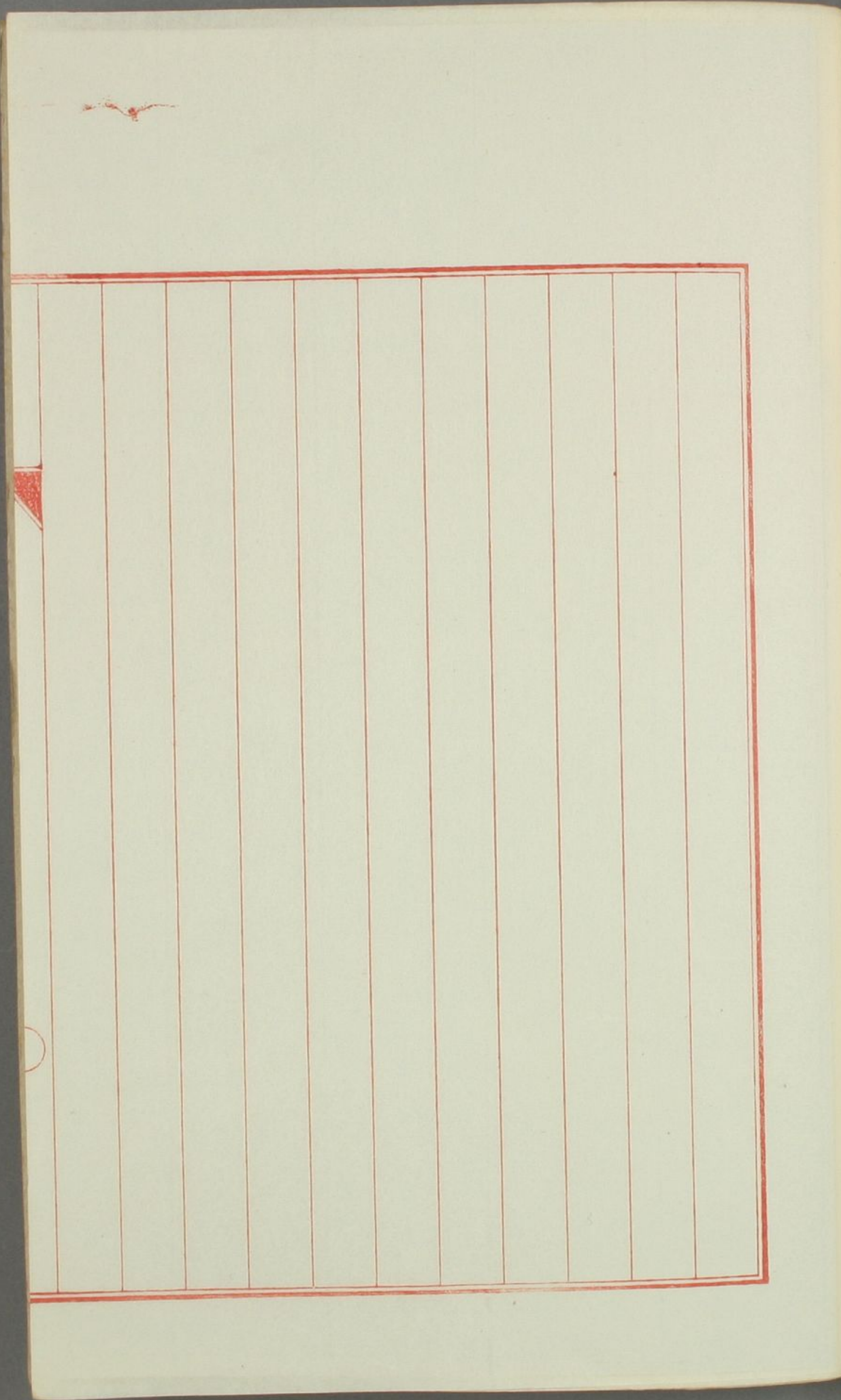
霜枯三月の風は餘所を吹きて、市内の書畫屋は更なり、諸國八方より曳々聲して押寄する實入りは、些つと金屏半双の落款に二十圓三十圓、高いと云へば高けれど、其れが千二年に飛び行く事と思へば安いものなり、翁は敢て偽君子を街ふの人にあらねば、固より無慾恬澹を養ふの思はなされど、うせ水池鏡と諦めて、謝禮は先方の芳志に

任せける内にも、折々懸立しう思はるゝは、金岡、覺猷などの古書に金岡覺猷も知らざる骨を折らせながら、僅に白銅一つと云ふ乞食扱ひの客は東京の書畫屋に多く、文晁一筆に十圓も奮み行くは大方田舎の客にて、仁明文徳の昔より千有餘年、歴代の書家五百に上はれる印譜の數は千餘顆を常に左右に備へて、先生生前の苦心を是に集めし鐵石も、今は要無ければ人手に渡しぬと、先生生前の苦心を達ふ者毎に語らるゝ未だ、何人の、更に語を繼ぎて言はるゝやうは、何しる腦を使ふ商賣なれば、先生床に親む事多く、床に親めば逸疾くも書畫屋の聞き傳へて、それ落款屋の先生が死ぬるぞ、息ある内に我も／＼と持ち來る註文枕元に山を成して、年々の盆暮は毎も是に渡しが、後には書畫屋も病氣の噂に慣れて、赤痢、虎列拉と競り上げ、去年の夏にはベストと披露せしも、それすら然ばかりの効無かりしが、這度び逾難しと聞きて一時に佳りし註文は、遺族が食うて癒て芝居見る位には餘りあれど、縦し其れ無くとも、年頃、體名を退けて市隱の託住みに、善財二十年、



今にしてこそ人にも語れ、一時は金の隠し  
場ばに困まれるまゝ、五十、百と紙幣しへいを掛物かぶに  
裏打うらして貯たくわへしが、家業柄かごうがらとて数かずある軸物じくぶつ  
の内うちより、過あやちて其そのを人に譲ゆづりて大騒おほさわさせ  
し事こともありしとかや、此この翁おきなの爲ためめに可あ惜は  
ら賈物げぶつを潤うるまされし有財うざい餓鬼がきは、此この翁おきなの  
可笑おかしくも亦また狡こつしき一生いっせいを何なにと見みるらん、  
翁おきなは高田藩たかたのはんの出身しゆしん、さては利りに敏みきも宜あたな  
りかし(風葉) 一月十三日二二日板





東  
棧  
原  
製



以下全て

白紙



明治三十七年

一月中院沈起孝

才多海山人